

自著と  
その周辺

山に登る前に読む本  
—運動生理学からみた科学的登山術—

能勢 博 著

講談社ブルーバックス

190頁

2014年8月20日発行

800円(税別)

ISBN978-4-06-257877-6

私は学生時代には京都府立医科大学の山岳部に所属し、春、残雪期、夏、秋、冬と信州の山を登り続けた。それは年間60日間に達する。したがって、6年間の医学部在学中1年間は信州の山の中にいたことになる。卒業後、母校の生理学教室に入り「環境生理学」の研究を行うことにしたが、その動機は、いつかは「高地生理学」をやらうともくろんでいたからでもある。それは思わぬ機会にやってきた。1998年長野冬季オリンピック開催を契機に、信州大学医学部がスポーツ医学分野の教授を全国公募した。それを見て「これは自分のためのポジションだ」と直感した。そして、応募し、採用していただいた。1995年8月15日のことである。本書は、このように「山に憑かれた一生理学者」の半生を記述した自分史でもある。

さて、昨年8月20日に本書が出版されてから1年になる。出版前は評判が不安だったが、研究仲間からは「このような本を書きたいが、なかなか書けない、よくやった」、「今の生理学は細分化されて専門外の者にはよくわからん、これこそ、正統派の生理学だ、うちの大学の生理学の教授にも読ませたい」、一方、山仲間

からは「こんな好き勝手な人生が許されていいのか、でも、許してあげるから、また一緒に山に行きましょう」などと言われている。多少のリップサービスはあるとしても、まずまずの評判にホッとしている。その評判を裏付けるように、今年3月12日に第4刷の重版を重ね、さらに近く台湾語にも翻訳されるそうである。素直にうれしい。

本書でも書いているが、登山には現在の自然科学で解明できる側面と、できない側面がある。前者は、「どのようにすれば安全な登山ができるか」というHowの疑問に答える側面であり、本書の主題である。後者は、「何故、山に登るか」というWhyの疑問に答える側面で、本書では最後に私の個人的な考えを少し述べている。

「何故、山に登るか」について、中世には、山には魔物が住み、神が宿り、人類の信仰の対象だった。しかし、近代ルネッサンス以降、山は自然科学の対象となり、人類の挑戦、征服をうける対象となった。我が国では、明治以降、宣教師が西洋近代登山を紹介したが、それに啓発された知識人、学生、そして、それに続く加藤文太郎に代表される山好きの社会人が、それまで日本の山々を覆っていた神秘のベールを次々に剥ぎ取っていった。そして、現在、山は信仰の対象ではなく観光の対象となった。その結果、人々は、山に登る前に「何故、山に登るか」についてあまり深く考えなくなった。

でも、本書の「山からのメッセージ」で書いたように、登山者は山道を歩きながら、五感を張り巡らせ、そこから受ける情報をもとに、登山という行為の意義付けを行っている。「何故、こんなシンドイ目をして山に登るのか」といった具合である。一方、生理学は生体現象の裏に潜む自然法則を見つけ出す学問で、一見、意味のなさそうなデータから、いかに本質的な理論を導き出すか、を目指している。それを、私は若い教室員に「神に近づく行為」といつている。「あなたが、自分の可能性を信じて、ひたむきに努力すれば、きっと神様はメッセージをくれるよ」という意味である。生理学の向こうに何を見るか、それは、登山の向こうに何を見るか、というのに似ている。

本書の冒頭に、10年余り、毎夏、常念診療所に通ったことが書いてある。登山口から少し登ったところに大きい榎の木があり、その傍らに古びた祠がある。私は毎年、登山前にその祠に安全登山を祈願する。そして、無事下山したときに、心をこめてその感謝のお参りをする。それは私の心の中に自然におこる衝動である。本書は、山に登るときの「覚悟」をもってもらうための本であるが、それを無事になし終えたときの「感謝」の心を持つことの意味を感じてもらえればもっとうれしい。

(信州大学先鋭領域研究群バイオメディカル研究所 能勢 博)

